

# 文化による思考様式が日英語に落とす影

嶋 村 誠

## I. ウチとソト

文化とは何か。この文化ということばは、実にいろいろな意味で使われているが、言語学や文化人類学でいう文化とは、鈴木（1973：i）の定義を借用するならば、「ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式上の固有の型（構図）」のことである。文化をこのように定義すると、言語活動の大部分が、文化という範疇に含まれることになる。すると、それぞれの文化から言語を除外した部分の差異が、言語の差異となって投影していてもまったく不思議ではない。また、言語によるコミュニケーションがいろいろな文化活動を支え、その基盤としての役目を果たしていることからすれば、むしろ逆に言語の差異が言語以外の文化に反映している場合もあるかもしれない。

先ほどのように、文化ということばを一般の人々による使い方よりもかなり狭く定義していても、それでもまだいろいろなものにこの定義があてはまるであろうが、少なくとも人間によって伝承されていくものである以上、そこに関与している人間が外界に対して持っている関心や思考様式の違いが、伝承される文化の違いとなってあらわれたり、使用する言語になんらかの違いとなって顕現すると考えて差し支えあるまい。本稿では、言語以外の文化の、そうした外界に対する関心や思考様式の違いと、言語の表現方法の違いとが並行していると考えられることの一部を、日英語を比較しながら検証してみることにす

る。

これまでに日本文化の特徴について論じたものは、古典的な著作としての Benedict (1954) をはじめ、枚挙にいとまがないが、その後衆目の的となったものをみると、日本の社会構造をタテ社会であると分析する中根 (1967)、「甘え」を日本人独得の心理としてとらえ、さまざまな日本社会の現象を「甘え」の心理をてこにして説明しようとした土居 (1971)、日本人を好奇心の強い国民としてとらえた鶴見 (1972) など、いずれも日本文化の特徴をそれぞれに興味深いひとつの概念で説明しようとしている。

このような日本人論、日本文化論、日本社会論によって提出されている諸概念のなかに、日本語という言語の特徴をとらえようとするときに役立つ概念がないかどうか検討してみよう。そこで以下では、まずウチとソトという概念に注目して、それが日本語文化圏と英語文化圏の中でどのようなところにみられるかということに触れ、そしてそれが言語にどのような形で現れているかということ、日英語の比較という観点から、考察してゆくことにする。ただし、ここでは英語文化圏をアメリカに、英語を米語に限って議論する。

ウチとソトという意識は、対人関係における心理的距離・空間を表す概念であり、内集団 (in-group) と外集団 (out-group) とを区別する働きをもつ。<sup>1)</sup> ウチの意識は仲間意識に通じる概念である。自分が強い関心を寄せ、仲間だと感じている身の回りの者に対してはウチの者意識が働き、他方、無関心でいることのできる赤の他人や、関心を寄せてはいても排除したいと思うような敵対心を抱かせる者に対してはソトの者意識が働く。また、ウチ、ソトという心理的距離・空間が物理的な空間となって反映していることもある。

ウチとソトの概念は、日本社会だけに存在するわけではなく、普遍的なものと思われるが、日本社会には他の社会に見られないほどの強いウチの者意識とソトの者意識があるようだ。そのことを象徴するかのよう、日本語にはウチとソトの意識を基盤にした表現がいくつか用意されている。たとえば、「内の人

---

1) ウチとソトについて社会学的に論じたものとして中野 (1983) がある。

(=自分の夫)」「内の者 (=家族)」「内祝い」「内々」「身内」「内輪」などのようにウチという概念を含む表現はかなりたくさんあるし、「内弁慶、外味噌」「<sup>うちづら</sup>内面、<sup>そとづら</sup>外面」「内孫、外孫」のようにウチとソトの概念が対照的に用いられる表現もいくつかある。日本人の精神構造にホンネとタテマエがあるといわれるが、ホンネはウチの意識に関係し、タテマエはソトの意識に関係すると言いうことができるであろう。

ウチとソトを区別する枠が日本社会でははっきりしているが、それと比較するとアメリカ社会では不明確である。「日本社会は、全体的にみて非常に単一性が強い上に、集団が場によってできているので、枠を常にはっきりしておかなければ一団団員が自分たちに、常に他とは違うんだということを強調しなければ一他との区別がなくなりやすい。」<sup>2)</sup> そのために、日本の団員は無意識のうちにウチとソトの概念を強く抱くようになっていると思われる。日本の住宅において、玄関で帽子や履き物を脱ぐという行為も、ウチとソトを明確に区別する意識を助長するはたらきを持っていると思われる。

一方、アメリカ人の行動様式から判断すると、アメリカ文化ではウチとソトの区別を示す枠が不鮮明なことが多いように思われる。また、個人主義が発達している社会であることが原因しているのかもしれないが、ウチの範囲が非常に狭くて、極端な場合には個人がウチの単位であったり、それとは逆に、ウチとソトの境界が存在していないのと同然なほど広い状態も見受けられる。open house と称して、ホストが一定の時間帯を設定しておいて、その時間内は客がいつでもホストの家に自由に出入りし、自由に振る舞うことが許されるという形式のパーティーが開かれたりする。招待された友人たちが、ホストファミリーの家の中で自由に振る舞い、冷蔵庫も勝手に開けてまるで我が家にいるのと同然の行動をとっている。ホストはそれを嫌がるどころか、友人たちがくつろいでくれていることに安心する。このような状態で、ホストも客も楽しく時間が過ごせるというのは、日本ではめったに目にしない光景ではなからう

2) 中根 (1967: 50-51) からの引用。

か。

日本の住宅には背の高い頑丈なブロック塀によってソトの公道とウチの敷地とを区別しているものが目だっているが、アメリカでは道路から家までがひとつづきの芝生であったり、垣根があっても形ばかりのものが多い。これらのことは、アメリカではソトからウチ空間への出入りが、直接できることが多いので、非常に容易に短時間に行えるということを示している。日本の場合は、ソトからウチ空間内へ入るには、履き物を脱ぐなどの、いくつかの関所があるため、時間もかかる。また、いったんウチ空間に入ってしまうと、そこからソトへ出るにも時間がかかる。

では、このようなウチとソトという心理概念、思考様式の日米の違いが、言語になんらかのかたちで反映しているであろうか。以下ではその点について、言語上のいくつかの項目を通して考察してゆこう。

## II. We と You

まず、ウチとソトの概念の日米における違いが言語表現の違いとなって顕現していると思われる例として、単語の選び方、とくに *we* と *you* の使い方の違い、を取り上げてみよう。

特定の人物ではなくて、一般に誰であっても当てはまるという場合の人物、すなわち *anyone* を指す表現として、日本人学生は好んで *we* を使いたがるが、そのような場合に英語の生得話者は *you* を用いることが多い。例えば、(1) に記したような意味のことを英語で表現する場合に、多くの日本人学生は (2) のように *we* を使う傾向がある。

(1) 小切手用の口座を開くにあたっては、小切手に好きなデザインを選ぶことができます。

(2) When we open a checking account, we can choose the designs we would like to have on our checks.

しかし、このような場合には、英語では (3) のように *you* を使うのが普通である。

- (3) When you open a checking account, you can choose the designs you would like to have on your checks.

また、日本人学生にとって総称人称の you がなじみの薄いものであるらしいことは、(4a) のように総称人称の you を使った疑問文に対して、(4b) のように同じく you で答えることのできる学生が非常に少ないことから伺える。

- (4) a. What kinds of architecture can you see in this city?  
b. You can see French, Spanish, and Creole architecture.

もちろん、英語の生得話者も総称人称の we を使うことがないわけではない。Jespersen (1933 : 151) は、you のほうが話し相手に多少とも直接訴えかける言い方なので、we に比べると親しみの感情がこもっているという程度の違いがあるが、総称人称としてどちらもくだけた文体で使うことができると説明している。また、Bryant (1962 : 239) は、we も、you と同様に、くだけた標準英語の不定代名詞用法として確立している、と記している。

では、you と we が、それらの変化形である your や our なども含めて、どのくらいの比率で用いられるのであろうか。<sup>3)</sup> おおよその傾向を知るために、総称人称の表現がたくさん含まれていると思われる文、すなわち諺を資料にして、Ridout and Witting (1967) を使って調べてみた。ただし、たとえ YOU が使われていても、(5) のように、命令文を含む場合には構文からの制約により WE で置き換えることができないのであるから、これらは調査対象からはずした。

- (5) Don't make yourself a mouse, or the cat will eat you.

このようにして同書の800個の諺を調べたところ、YOU を使っているものが(6)に列挙した通り26例あり、他方、WE を使っているものは、(7)に記したとおりわずか2例しかなく、圧倒的に YOU の方が多く用いられている。<sup>4)</sup>

- (6) a. A thing you don't want is dear at any price. (676)

(欲しくないものはいくら値段がついていても高すぎる)

3) 以下では、説明の煩雑さを避けるために、総称人称の you やその一連の変化形 (your, yourself など) を大文字を使って YOU と書き表し、総称人称の we やその一連の変化形 (our, us, ourselves など) を WE と記すことにする。

4) 英文の引用の直後に記したかっこ内の数字は、同書における諺の番号。

- b. As you make your bed, so you must lie in it. (23)  
 (寝床の敷き方通り寝なければならなくなる [自業自得の報いはまぬがれない])
- c. As you sow, so shall you reap. (24)  
 (まいた種は刈らねばならぬ)
- d. Between two stools you fall to the ground. (51)  
 (ふたつの腰掛けの間で尻もちをつく [虻蜂とらずに終わる])
- e. If you don't like it you may lump it. (332)  
 (気に入らなくても我慢せよ)
- f. If you run after two hares you will catch neither. (333)  
 (二兎を追う者は一兎をも得ず)
- g. If you sing before breakfast, you will cry before night. (334)  
 (朝から笑っていると日暮れまでには泣くことになる [はしゃぎすぎるなよ])
- h. What can you expect from a hog but a grunt? (724)  
 (ぶーぶー以外に何を豚に期待しえようか [馬鹿は馬鹿なことしか言わない])
- i. Who chatters to you will chatter of you. (760)  
 (人のうわさをきみに語る者はきみのうわさもするだろう)
- j. You cannot burn the candle at both ends. (777)  
 (ろうそくの両端を燃やすことはできない [昼間も夜も体を使って無理をすることはできない])
- k. You cannot catch old birds with chaff. (778)  
 (老鳥はもみがらでは捕れない [一筋縄ではいかない])
- l. You cannot get a quart into a pint pot. (779)  
 (1クォートの液量を1パイントの容器に入れることはできない [無理なことはできない])
- m. You cannot get blood out of a stone. (780)

(石から血を取り出すことはできない [冷酷な人から同情を得ることは無理なこと])

- n. You cannot have your cake and eat it. (782)  
(菓子は食えばなくなる [両方いいことはできない])
- o. You cannot make a silk purse out of a sow's ear. (784)  
(豚の耳で絹の財布は作れない [粗悪な材料で立派なものはつくれない; 人間の本性は変えられない])
- p. You cannot make an omelet without breaking eggs. (785)  
(卵を割らずにオムレツは作れない [まかぬ種は生えぬ])
- q. You cannot make bricks without straw. (786)  
(わら無しでレンガは作れない [必要な材料や資金がないのに仕事はできない])
- r. You cannot put old heads on young shoulders. (787)  
(若い者に年長者と同じ分別を期待することはできない)
- s. You cannot run with the hare and hunt with the hounds. (788)  
(兎とともに走り猟犬とともに狩りをすることはできない [内股膏薬はできない])
- t. You cannot sell the cow and drink the milk. (789)  
(牛を売りその乳を飲むことはできない [二つ良いことはない])
- u. You cannot serve God and mammon. (790)  
(神とマモンの両者に仕えることはできない [汝ら神と財宝とに兼ね仕うるあたわず])
- v. You cannot teach an old dog new tricks. (791)  
(老犬は新しい芸を覚えぬ [古い木は曲がらぬ])
- w. You may know by a handful the whole sack. (792)  
(一握りの品によって大袋の中身全体が分かる [一滴舌上に通じて大海の塩味を知る])

x. You may lead a horse to the water, but you cannot make him drink. (793)

(馬を水のあるところまで連れていくことはできても、水を飲ませることはできない [本人にその気がなければどうしようもない])

y. You must grin and bear it. (794)

(笑ってこらえねばならない [じっと我慢するしかない])

z. You must lose a fly to catch a trout. (795)

(毛針を捨てずに鱒は釣れない [何かするには小さな犠牲は避けられぬ])

(7) a. If each would sweep before his own door, we should have a clean city. (321)

(町をきれいにしたければ自分の家の前を掃けばよい)

b. We soon believe what we desire. (720)

(願っていることは信じやすい)

選り出されたリストを眺めてみると、You cannot という同じ表現で始まる諺が非常に多い。このように諺だけを対照にして調査したのでは偏りがあるという危険性は避けられないが、そのことを差し引いて考えても、英語では総称人称として WE よりも YOU のほうがはるかに多く用いられる、ということは言えそうである。

したがって、上記のように日本人学生が総称人称として WE を使っても間違いであるというわけにはいかないが、日本人が WE を好んで使うのに対して、英語の生得話者は YOU を好んで使う傾向にある、ということは非常に興味深い点である。anyone という意味をもつ総称人称の表現を使うとき、すなわち誰にでも当てはまるというときには、自分も当然それに含まれているわけであるから、ウチとソトの意識の強い日本人には、自分も含まれていることを明らかに示す WE は使いやすけれども、一方、YOU を使うと、まるで自分を除外して表現しているかのように思えて、受け入れにくいのであろう。



### Ⅲ. 語順

いま WE と YOU について述べたことは、語彙の選択とウチとソトの意識による心理的空間に関係することであった。ではつぎに、言語の表現構造によっては、何がウチとソトの物理的な空間なのであろうか。

先ほど、ホンネの部分がウチに相当するということに触れた。ホンネとは本心からでた言葉であり、ウチの論理に従ったものである。また、タテマエは表向きのうわべのことであり、公のソトの論理に従ったものである。そこで仮説として、言語表現にとってウチの空間とは、談話文法で言うところの、重要な、新しい情報を持っている部分、すなわち話し手が聞き手に伝えたい部分のことであり、ソトの空間とは、重要でない、古い情報を持っている部分、すなわち聞き手にとって既知の部分や言語として成り立つために形を整える部分のことである、と考えてみよう。

すでに述べたように、ソトからウチへ容易にたどりつけるのがアメリカ社会のウチ空間であり、なかなかたどり着けないのが日本社会のウチ空間であるとすると、はたしてこうしたそれぞれの社会の特徴が英語と日本語に投影しているであろうか。

例えば、(8)の日本語を読むとき、第一文で踊子の年齢のことが書いてあるが、第二文に進んで「私には分らない」の部分まで読んだだけでは、まだ年齢のことを引き続き述べようとしているのか、それともなにか他のことについて話を移そうとしているのか判然としない。「古風の」を過ぎて「不思議な」まで読んでもまだ見当がつかない。「形に」「大きく」のあたりまでくると、形のあつもので大小を問題にすることができるものについて言及しているらしい、ということまではわかるが、まだ具体的に何のことなのか、と読者は焦らされたままである。そして文の最後になってやっと髪の毛の結い方のことだということがわかるしくみになっている。このように、読者が知りたいと思うウチの部分にまでなかなかたどり着けないわけであるから、日本語の言語表現は、構造的に見て日本社会のウチ空間のしくみと並行的であるということになる。

(8) 踊子は十七くらいに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。

(川端康成「伊豆の踊子」 11)

一方、(8) を英訳した (9) をみると、

(9) She was perhaps sixteen. Her hair was swept up in mounds after an old style I hardly know what to call.

(Seidensticker, trans., "The Izu Dancer" 10)

日本語とは対照的で、第二文は“Her hair”が文頭からいきなり示されていて、何のことについて述べているのかということが、容易に短時間のうちに分かるしくみになっている。英語においても、言語表現とそれが使われている社会の特徴とが並行的である、ということができよう。

(8) においては、たまたま「髪」に言及する表現が文末近くに置かれているのであって、(10) のように前の方に置くこともできる、という反論がなされるかもしれない。

(10) 踊子は十七くらいに見えた。髪は私には分らない古風の不思議な形に大きく結っていた。

しかし、日本語では (10) のようにも表現することができるにもかかわらず (8) のような表現が使われることこそが興味深い点であり、これもウチの意識が強いことを反映していることの証左であるということができよう。また、(9) の英語のほうは、her hair を文末近くに移動することはそれほど簡単ではなく、このことも英語においてウチの意識が日本語よりも弱いことを反映していると言えるのではないだろうか。

つぎに、修飾語と被修飾語との前後関係について考えてみると、日本語では、(8) の「私には分らない古風の不思議な形」の部分のように、被修飾語が修飾語の後に位置するという制約がある。英語では、被修飾語が修飾語の後に位置することもできるが、(9) の“mounds after an old style I hardly know what to call”の部分のように、被修飾語が修飾語の前に位置することもできる。特に、修飾語が長くなって句や節の場合には、被修飾語が前に位置するこ

とが普通である。このように、ウチ空間としての被修飾語が日本語ではかならず後置され、英語では修飾語句が長くなればなるほど、被修飾語句が前置されることが多いということも、ウチ空間に関する日英語社会の違いと並行している。

#### IV. 文順

いま、ひとつの文の内側における語順とウチ・ソトの意識の間に相関関係があり、日英語のあいだに相違がみられるということを観察したが、文のわくを越えて、文と文の間にも同様の相違がみられる。

すでに、外山（1973：10）が、翻訳をするときの心得として、「語順をかえなくては日本語らしくならないのなら、文順も適宜変更しなければ日本語らしくならないはずではなかろうか」と述べて、機械的に語順だけを入れ換えるのではなくて、文順を入れ替えることも必要であるということを描き出しておられるが、具体的にどのような文順の入れ替えを指して述べておられるのか、同書からは伺うことができない。

そこで、日本文学作品とその英語訳とを文順という観点から比較してみよう。

- (11) 私は二十才、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白<sup>こんがすり</sup>の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして朴歯の高下駄で天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。

(川端康成「伊豆の踊子」 9)

- (12) I was nineteen and traveling alone through the Izu Peninsula. My clothes were of the sort students wear, dark kimono, high wooden sandals, a school cap, a book sack over my shoulder. I had spent three nights at hot springs near the center of the

peninsula, and now, my fourth day out of Tokyo, I was climbing toward Amagi Pass and South Izu. The autumn scenery was pleasant enough, mountains rising one on another, open forests, deep valleys, but I was excited less by the scenery than by a certain hope.

(Seidensticker, trans., "The Izu Dancer" 8)

(11) に引用した、日本語による原作の方において、第一文を読んだ段階では、高等学校生が通学している時の様子を描いたものであろう、と予想しながらも確信できないまま第二文に読み進むと、その予想に反して、伊豆を一人旅している姿を描いたものであることを知らされる。読者はこの時点でやっと状況の全体像を把握することができる。言い換えると、ウチの範囲にたどり着くことができるわけである。一方、(12) に引用した英語訳をみると、第一文を読んだ時点ですでに全体像がつかめるようになっている。すなわち、原作を基準にしていえば、一人で伊豆を旅しているという部分と、身なりについての細かい描写とが、第一文と第二文の間で入れ替わっている。また、「私」が二十才の時のことであるという部分については、全体把握に役立つと思われる記述であるから、英語訳でも元のまま第一文の位置に置かれている。このように英語では、最初から全体を把握しやすくするために、文順の入れ替えや整理が行われている。この一例からも、日本語の方は、ウチの空間にいたるまでに紆余曲折があって時間がかかり、英語の方は、直接にウチの空間に入れるようにオープンな構造をしているということができよう。

細かく観察すると、ほかにもいくつか興味深い違いがみられるが、その余裕はないので割愛する。ただ、もう一点だけ「重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも」という部分について指摘しておく、日本語では、重なり合った山々、原生林、深い溪谷という詳細な具体例を3つ並べておいて、そのあとでその3つを「秋」という言葉で総括したうえで、それに見惚れているというふうが続いているのであるから、最後になって筆者のウチの世界にたどり着くようになっている。それと比較すると、英語訳では、まず最初から

The autumn scenery was pleasant enough と書かれており、直接に筆者のウチの世界に案内されてからのちに、さらに細かくその内容が mountains rising one on another, open forests, deep valleys と続いており、日本語はウチへの接近に時間がかかるが、英語はウチへの接近が近いということを示している。<sup>5)</sup> この例などは、先に述べた文中における語順の入れ替えと、文と文の間の文順の入れ替えとの中間的な段階のものと考えることができよう。

## V. 連結辞

文順のことを述べたついでに、文章のロジック、すなわち文と文の間の論理関係を表す語についても触れておこう。文と文の論理関係を表す語を英語の中で多用すると、幼稚な、もたついた文体になってしまうのに対して、日本語では論理関係を言語化してつなぎの言葉として表現しておいた方が、潤いのある安定した文体になることが多いようである、ということを嶋村(1989:644)で指摘したことがある。また、時間の経過の前後関係を表す語についても同様である。これらのことを、本稿のウチとソトの概念から検討するために、例えば、先ほどの(11)(12)で引用した箇所の直後の部分、すなわち(13)(14)、を観察してみよう。(13)の日本語には、ここで問題としている表現に下線を加え、(14)の英語には、それに相当する語が見当たらない箇所に^印を付けておく。

- (13) そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲った急な坂道を駆け登った。ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。余りに期待がみごとくに的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

(川端康成「伊豆の踊子」9)

5) Kaplan (1966) は、各国からの外国人留学生が書いた英作文を対照レトリックの観点から調査して、各留学生の母語において効果的な話の進め方とされている特有のレトリックが、英作文にも投影していることを指摘している。それによると、英語は、話の進め方が直線的であり、そのものずばりのものの言い方をするのに対して、東洋語では、そのものずばりに話の核心に触れるのではなくて、間接的な取り上げ方をし、ある程度は話題に触れながらその回りを、いわば螺旋を描きながら旋回する、という論の展開方法をとる、と分析している。

- (14) ^ Large drops of rain began to fall. I ran on up the road, now steep and winding, and at the mouth of the pass I came to a tea-house. ^ I stopped short in the doorway. ^ It was almost too lucky: ^ the dancers were resting inside.

(Seidensticker, trans., "The Izu Dancer" 8)

(13) に引用した原作の日本語では、論理関係も時間関係も言語化されているが、英語では、最後の4番目の箇所については、終止符（.）でなくてコロンの（:）を使うことによって、読者による論理関係の理解をある程度助けるための表記方法が用いられてはいるが、ほとんど言語化されないで、前後の関係から判断できるようになっている。英語では、わざわざ言語化しないでも、前後の文の内容から直接にこのような論理関係や時間関係が理解できるということである。こうしたことをウチとソトの概念に照らし合わせてみると、日本社会ではソトからウチ空間にたどりつくまでの間に、はっきりとしたいくつかの関所があり段階的になっているのに対して、アメリカ社会では段階的ではなくて直接的にウチ空間に通じていることが、言語表現にも結びついて映し出されている、とすることができる。

## VI. モダリティ

Fillmore (1968) は、文というものを (15) のように定義して、

(15) Sentence → Modality + Proposition

文 (Sentence) が、モダリティ (Modality) と命題 (Proposition) から成るとする立場をとっているが、この考え方を受け入れるとすると、文は話し手が客観的に世界の森羅万象を描こうとする部分、すなわち命題の部分と、それを素材として話し手が自分の心的態度を聞き手に示そうとする部分、すなわちモダリティの部分から成るということになる。このモダリティの部分が本稿のウチの空間に関係し、具体的には、時制、相、否定辞、発話時における話し手の心的態度を表す部分がそれに相当する。例えば、(16) において、

- (16) a. わたくしはここに上記通関港における上陸許可を申請し、この申

請にかかわるすべての手続きを、ルイス・メイトランド法律事務所のアラン・メイトランドに一任します。

(永井淳訳『権力者たち』196)

- b. I hereby make application for permission to be landed at the above port of entry and I have retained Alan Maitland of the firm of Lewis and Maitland to act as counsel for me in all matters pertaining to this application.

(Hailey, *In High Places* 141)

モダリティは下線部分に含まれているが、日本語ではそれが文末に位置し、英語では文頭にごく近いところに位置しており、ここでも日本語ではウチの空間にいたるまでに時間がかかるのに対して、英語ではほとんど文の最初に近いところにウチ空間が位置していることがわかる。

また、鈴木孝夫(1975:26-27)は、あるイギリス人物理学者の説として、日本人の学者が書く学術論文に、「であろう」、「といってもよいのではないかと思われる」、「と見てもよい」というような、歯切れの悪い文が多用されていることを指摘し、このような論文中の推理や主張の場で使われているこの種の日本語を英語にうつすことはまず見込みがなく、とくに「であろう」は英語に訳すことが事実上、不可能であるという考えを引用している。この種の句は、モダリティを表す部分と重なっており、日本語において、ますますウチの領域を分かりにくいものになっていることになる。

以上、日本文化とアメリカ文化におけるウチとソトの概念の違いが、日英語に言語表現の違いとなって反映していると考えられるということを、いくつかの言語事実を通して検証した。

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

#### 参考文献

Benedict, Ruth (1954), *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Tokyo: C. E. Tuttle.

- Bryant, Margaret M. (1962), *Current American Usage: How Americans Say It and Write It*. New York: Funk & Wagnalls.
- Fillmore, Charles J. (1968), "The Case for Case." E. Bach and R. T. Harms eds. (1968), *Universals in Linguistics Theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1-88.
- Hailey, Arthur (1970), *In High Places*. Pan Books.
- Jespersen, Otto (1933), *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Kaplan, Robert B. (1966), "Cultural Thought Patterns in Intercultural Education," *Language Learning* 16, 1-20.
- Ridout, Ronald, and Clifford Witting (1967), *English Proverbs Explained*, Pan Books.
- Seidensticker, Edward G., trans. (1964), "The Izu Dancer." By Yasunari Kawabata. *Atlantic Monthly* 1 (1955), 108-14. Rpt. in *The Izu Dancer and Others*. Tokyo: Hara Shobo, (1964), 7-67.
- 川端康成 (1964)、「伊豆の踊子」『英和対照 伊豆の踊子』(現代日本文学英訳選集 1) 東京：原書房、7-68。
- 嶋村誠 (1989)、「日英語表現の対応」『商学論究』第37巻 1・2・3・4号合併号、関西学院大学商学研究会、629-646。
- 鈴木孝夫 (1973)、『ことばと文化』東京：岩波書店。
- 鈴木孝夫 (1975)、『閉ざされた言語・日本語の世界』東京：新潮社。
- 土居健郎 (1971)、『甘えの構造』東京：弘文堂。
- 中根千枝 (1967)、『タテ社会の人間関係』東京：講談社。
- 永井淳訳 (1979)、『権力者たち』(アーサー・ヘイリー) 新潮文庫。
- 外山滋比古 (1973)、『日本語の論理』東京：中央公論社。
- 中野卓 (1983)、「内と外」相良亨、尾藤正英、秋山虔編『講座日本思想 3』東京：東京大学出版会、329-64。
- 鶴見和子 (1972)、『好奇心と日本人』東京：講談社。